論　文

歴史ファンと歴史学の専門家との「協働」
－歴史イベントに「参加する」という歴史実践－

○伊藤陽寿*1　齊藤太一*2

キーワード：パブリック・ヒストリー、「歴史実践」、歴史ファン、専門家、「協働」

1　はじめに

近年、言語論的転回や歴史修正主義への対抗として、「パブリック・ヒストリー」の取り組みが盛んになってきている[参考文献1）＊以下参＊）と省略表記する。]。パブリック・ヒストリーとは、歴史の専門家と歴史の専門教育を受けていない大多数の人々とが、歴史実践に共に取り組む活動[参2)]のことを指している。こうした実践を経ることにより、上下関係を打ち壊し、多様な人々が多元的な価値を尊重し、同じ立場で協働して民主的に歴史を交渉し合うことが可能になるのではないかとされている[参3)]。

学会においても、地域社会や博物館との協働やTwitter などの SNS を介した取り組みの特集が組まれるなど[参4)]、歴史実践のあり方が注視されている。また、研究者個人のレベルにおいてもYouTubeで専門知を公表する試み[註1]が盛んになりつつあると言って良い。このように、現在における歴史実践、引いてはパブリック・ヒストリーの在り方は、特定の機関と研究者・学会との協働や、専門家自身による発信が目立つものであると言えるだろう。

一方で、「歴史」を全く専門とはしていない民間の歴史ファンが集まり、彼ら彼女らが好む歴史（歴史事象）について「活動」する「歴史イベント」も、各地で開催されている。歴史イベントにおける歴史ファンの「活動」は、史跡巡り、歴史に関する語らい、講演会主催、歴史グッズの作製や販売など多岐に渡っており、かつそれなりに盛んに行われてはいる。ただ、その開催について歴史学の専門家に認知され、かつ専門家自身が関わりを持とうとすることは稀であると思われる。自身の関わる時代や地域に関する企画であった場合には講演会の講師などというかたちで関わることはあるだろうが、みずからも歴史ファンとして率先して他の企画にも参加するということは多くないのではなかろうか。こうした現状もあり、専門家自身のこうした行動がパブリック・ヒストリーの一環として位置付けられることはいまだ少ない状況にある。

先行研究においても、普通の人々が様々なかたちで過去に接する「歴史実践」[引用文献1)]については言及があり、かつ民俗学の分野を中心に普通の人々が参画する「イベント」についての研究は存在する[註2]。だが、普通の人々である歴史ファンたちが企画するイベントに専門家が客体として「参加する」という行為にはいまだ目が向けられていない。とは言え、ある特定の時代や地域を研究している専門家であっても、自分が研究している地域や時代でもそうでないところでも、いち歴史ファンとして歴史イベントに関わり合うことは可能であるはずだ。

以上のような問題関心から本稿では、共著者である齊藤が代表を務め、歴史ファンの手によって歴史イベントを実施している民間団体「ヒストリンク・歴史を楽しむ会グループ」における活動を紹介し、そこに筆頭著者である伊藤（以下、筆者）が歴史学を研究する者としてどのように関わってきたのかを述べる。歴史の専門家が歴史ファンの主催のイベントに「参加する」という行為を通して為される「歴史実践」、すなわちこれを、専門家と歴史ファンの「協働」と位置付け論じ

*1　至誠館大学　現代社会学部
*2　ヒストリンク・歴史を楽しむ会グループ　代表

ることで、専門家の社会的役割を示したいと考えるのである。

なお、これまではやや曖昧に専門家や研究者という用語を用いてきたが、以後では、大学などで歴史学の専門教育を受けかつ歴史学に関する論文執筆や歴史研究に従事する者、いわゆる歴史学の研究者や郷土史家、大学院生のことを「専門家」と表記することとする[註3]。一方で、「専門家」のカテゴリーに当てはまらない者を「非専門家」、その中でも取り分け「歴史」を漠然とでも好んだり、「歴史」に関連付けられたイベントに自覚的に関わり合いを持とうとする普通の人々を「歴史ファン」として定義したい。

2　歴史を楽しむ会グループ

歴史を楽しむ会グループは、2018 年に「歴史ファンと研究者、歴史ファン同士の交流の垣根を下げ、また互いの関係を深めるコミュニティーになることを目的」として結成された[註4]。

当初は、日本の南北朝時代のファンを集めた「南北朝時代を楽しむ会」が同年 6 月に発足したのを皮切りとし、2019 年には歴史ファンが講師となり、みずからの好む時代や人物についてプレゼンテーションを行う「歴史寺子屋」が初めて開催された。また、会が存在しない時代（発足当初は南北朝時代以外の時代）に関する企画を行ったり、各会とは異なる企画を扱う「歴史を楽しむ会」が発足し、グループの母体となった。2020 年には、江戸時代のファンを集めた「徳川家を楽しむ会」が発足したほか、歴史マッチングサービス「Histlink」（以下、ヒストリンク[註5]）が始動した。さらに 2021 年には、日本の古代史のファンを集めた「古代史を楽しむ会」や「世界史を楽しむ会」が発足している[註6]（以下、会名や企画名について、初出時以降は括弧を外す。）。

2.1 各部会における活動内容

各会の活動は、「史跡散策」「講座・講演会」に大別できる。

史跡散策は、各会の関わる時代にまつわる史跡を散策する企画である。各会の時代に関係する地域に出かけ、その地域や地域の史跡に関わる郷土史家等のガイドや説明を受けながらその地域を散策する。大河ドラマなどの流行に合わせて、各会に合った散策企画を行う場合もある[註7]。

講座・講演会は、各時代や内容に関する専門家を講師・プレゼンターとして迎え、基本的に研究の最先端などといったより専門性の高い内容を歴史ファンに提供するものである。

近年行った企画を挙げると、現在連載中の歴史マンガや大河ドラマといったエンターテイメント性の強い内容のものや、新書や選書などといった一般向けの歴史本を最近刊行した著者を招いてのプレゼン等もある。

内容についての起案は、会長や運営がやりたいと思ったもののほか、会員などへのアンケートによって決定する。この講座・講演会についても、史跡散策同様に各会あわせて年間 20 回程度開催している。

また歴史を楽しむ会では、会員の希望により歴史寺子屋を開催し、それぞれに興味のある内容をプレゼンする。プレゼンターは自分が好きな歴史や人物などを人前でプレゼンすることにより、周りから共感や賞賛を得られるだけではなくより深く自分の嗜好について考える機会が得られるのである[註8]。

2.2 他の活動内容

第8号　わいわい歴史通信　2022年（令和4年）10月1日

世界で（ひとつ）の歴史業界紙
発行者
わいわい歴史通信
編集委員会
（編集　齊藤）
☆問い合わせ・取材依頼は以下へ
historyenjoy@gmail.com

わいわい歴史通信

第8号
2022年10月1日（土）
季刊（1、4、7、10月発行）
購読料（税込）
年間2,000円、1部500円

酒井家庄内入部400年記念シンポ開催
鶴岡市　10月の記念事業に弾み

羽前国庄内（現山形県鶴岡市）に酒井氏が移封されてから400年目に当たる今年、鶴岡市は200年末に「酒井家庄内入部400年記念事業委員会」を立ち上げ、市内での様々な記念事業を企画している。

7月11日には東京・日比谷の「千代田区大会議室」で、酒井家庄内入部400年記念シンポジウムを開いた。

庄内藩に入った酒井家は忠勝以来、十人の藩主を数えた。

9月8日には、鶴岡市で「酒井家庄内入部400年記念事業委員会」が主催する記念事業の一環として、「酒井家庄内入部400年記念シンポジウム」を開いた。

酒井家庄内入部400年記念シンポジウム

庄内藩の歴史を盛大に振り返る機会となっている

☆ニュースガイド☆
●自粛期間の歴史探訪・・・3面
●中学受験に歴史の出題・・・4面
●歴史ミステリ『ゆめ』・・・6、7面
●天保仕込『毎の鶴』（3）・・・9面
●コラム『新幾度の仁和』・・・11面
●パソコン96的嘱の電脳・・・・12面

広告
現代の志塾　多摩大学
グローバル視点の歴史も学べる場
アクティブ・ラーニングの多摩大
新しい社会に生きる知の力を育てる
Webオープンキャンパス、オンライン個別相談随時開催
公式HP・QRコード
多摩キャンパス（経営情報学部・大学院、総合研究所）〒206-0022東京都多摩市聖ヶ丘4-1-1TEL 042-337-1111（代表）
湘南キャンパス（グローバルスタディーズ学部）〒252-0805神奈川県藤沢市円行802番地TEL 0466-82-4141（代表）

図-1 わいわい歴史通信の１面
（以下、図はすべて齊藤が提供）

他にも、歴史を楽しむ会では歴史ファンを交えたり役員が中心となって行っている企画が存在する。それは主に、「歴史を楽しむ読書会」「通史塾」「わいわい歴史通信」「わいわい歴史通信・ラジオ版」「よろず歴史庵」といった企画である。歴史を楽しむ読書会は、歴史ファンを中心とした読書会企画である。副代表のまいと氏がプロデューサーを務め、主催者がテーマをあらかじめ決めたうえで参加者が PR したい本を持ち寄り、企画のテーマに沿ってプレゼンを行うというものである。テーマや扱われる本は、その時に話題になっているものや会員の関心の高い時代やテーマに即したもので行われる。コンセプトについては念入りに議論される中で決められることが多いが、反面、プレゼンについては企画や自分が選んだ本に対する「情熱」を語るなど自由度の高いかたちで行われる。

通史塾は毎月第二、第四土曜日にオンラインで開催され、現役の高校日本史教員の解説のもとに日本史の教科書を通読するという企画である。この企画は、中高で日本史を一通り学んだ方への学び直しを促すという目的を持ちつつも、一方で日本史をほとんど学んだことのない者の参加も可能としている。このような初心者向けの企画を行うことで、学び直しと同時に新たな歴史ファンを増やして行こうというのが、本企画の意図である。

わいわい歴史通信（図－1）は、2021 年 1 月に刊行が開始された「世界で唯一の歴史業界新聞」（発行約 90 部）である。年 4 回（季刊）のペースで刊行されており、会の運営企画や直近の世間の歴史に関する話題、歴史に関するコラムなどを連載している。扱う時代などは、歴史ファンの興味関心に沿った部分が多いため中近世の話題が多いが、古代史や世界史の記事もある。わいわい歴史通信のラジオ版（通称：わいラジ）は、わいわい歴史通信のラジオ版を意識したポッドキャストである。役員や大河ドラマを愛するフリーアナウンサー・小川さなえ氏[註9]を中心としたメンバーをレギュラーとし、ほぼ毎週配信されている。内容は、新聞に載せ切れなかった話題についてや、新聞で触れられた話題を相互補完する存在であると言える。また、新聞版よりも速報性を重視したり、歴史についての「ビギナー」を意識して配信されているのも特徴である。

ラジオ配信の企画としてもう一つ、よろず歴史庵というものが存在する。この企画の出演陣はすべて会の役員陣であり、会の企画というよりも会を運営している者たちの個性や強みを引き立たせるという性格を有しているのが特徴である。役員たちが自分の興味関心のある事柄と歴史的な話題とを引き付けてプレゼンを行うという、内輪的であるものの役員たちのありのままを聴いてもらうことでリスナーの歴史への興味を促すという目的を持った企画である。

3　ヒストリンクと歴塾

各会以外の活動としてそれぞれ独立したかたちで行われているのが「ヒストリンク」や「歴塾」である。

3.1 ヒストリンク

図-2　ヒストリンクが講師を仲介し、
浜松市で行われた大石氏の講演の様子

ヒストリンクは、民間・学生・企業などと歴史の専門家（大学院生含む）を結び付けるサービスであり、

「あなたの"歴史"まわりの「困った」をなくす。大学生や自治体をお助けするサービス！」というフレーズを売り文句としている。

本企画は、個人や団体からの相談がヒストリンクのもとに来た際に行われる。主な相談内容は、大学生や大学院生による大学での補習や進路相談、さらには企業やイベント運営希望者に対しての専門家の紹介・仲介が主である。

対象となる専門家については、ヒストリンクの HP に一応のリストが存在するが、そのほとんどは過去に講演などを引き受けたことのある者である。したがって講師陣は、歴史学に関する大学教員だけではなく、他分野の研究者や歴史イベントの主催者や参加者、歴史に関する業界人や経営者に至るまで幅広く存在している。ただし、相談者は必ずしもこの中から専門家を選ばなければならないという訳ではなく、ここにある専門家以外の者に相談者がアプローチをしたい場合には、希望に応じて代表の齊藤が便宜を図ることもしている。

最近では、鉄鋼業界団体の暁鋼会からの、著名な歴史業界人を講演の講師として呼びたいという希望により、NHK「歴史探偵」などに出演している河合敦氏を仲介・紹介して講演会（2022 年 6 月）をサポートした。

2022 年 8 月には株式会社みそら（浜松市）から、満洲国に関する講演の希望があり、人気歴史系 VTuber であり、満洲国などの研究者でもある東條のと氏を仲介し、約 30 人が集まるオンラインイベントを開催した。5 月には、浜松市で行われた大石泰史氏（戦国時代研究家、大河ドラマ「直虎」時代考証など）を呼んでの講座（主催・静岡の歴史をつなぎ楽しむ会）も講師を仲介・派遣した。

小説作家・天津佳之氏の『あるじなしとて』の誕生では、ヒストリンクが、同書の出版を手掛けた PHP 研究所と天津氏をつなげ、作品の発行を陰でサポートした。天津氏は日経小説大賞を 2020 年に受賞した気鋭の作家であり、今後のさらなる活躍につながるマッチングとなれば光栄だ。

3.2 歴塾

歴塾とは、歴史に関する業界の人間を招くなどして代表である齊藤と対談をするという、齊藤の私塾的な企画である。この企画は、約 1 ヶ月に一度のペースで開催されている。対談・講座の内容は、その回ごとのテーマ、ゲストによって決めている。これまでは、先述した小説作家の天津佳之氏をはじめ、歴史イベントの企画開催だけではなく「戦国魂（せんごくだま）[註10]」という歴史グッズの専門店も経営している鈴木智博氏、マンガ家芸能プロダクション「まんがたり[註11]」を経営し、近年は歴史漫画にも力を入れている前田雄太氏、伊豆を拠点として地域の歴史・民俗・文化などを具現化するプロジェクトである「軽野造船所[註12]」を主宰する岩崎敦史氏などが登場し、その世界の苦労話や裏話などを披露してきた。

参加者の多くは、みずから歴史ビジネスを立ち上げたり企画を盛り上げたりすることを目的として参加している。ここから、参加者たちは各界の当事者であるゲストの話を聞いたりゲストとつながったりすることを通し、各々が本企画を目的達成の一助にしようと目

論んでいるのがわかる。

4　南北朝時代を楽しむ会

歴史を楽しむ会の部会において最初に組織され、かつもっとも会員数の多い会が南北朝を楽しむ会である[註13]。本章では本会に関係した企画である「研究部」「南北朝タイムズ」「南北朝フェス」「太平記 WS」について触れて行く。

4.1 研究部や個人での研究会開催

南北朝時代を楽しむ会「研究部」(以下、研究部) は、月 1 回オンラインで開催しており、南北朝時代に興味を持つ参加者が『南北朝遺文』を読み進めている。参加者は、主婦や会社員など歴史学の専門教育を受けていない者が中心である。しかし、皆が共通して日本の南北朝時代に興味があり、かつ原典を読んで歴史を理解したいという気概に溢れている。

研究部では、あらかじめ当日のテキストの講読箇所が伝えられ、その箇所を参加者が輪読するというかたちを取っている。漢文体で書かれているテキストであるため、史料読みに関しては個人差がある。ただどの参加者も、みずからの南北朝時代に関する興味関心やこれまでの人生の経験から知り得た知識を十全に活用し、史料読みに取り組んでいる。

そうした中で、中世漢文や中世史特有の文書知識を必要とせねばならない専門的な文書読みが要求される箇所については、参加者のなかでも筆者のような歴史学についての専門教育を受けている者が指南役となり、読解を補助することがある。この点は、歴史ファンの参加者だけではよくわからないままで読み進められてしまう箇所でも、文書の表現や言い回しなどから意味を見出し指摘することの出来る指南役が存在することで、より深くテキストを講読することが可能となる。専門家によるこうした営為は、歴史をより深く吟味したいと考え参加している歴史ファンにとっても喜ばしいことであると言える。

一方で、研究部参加者の歴史ファンのなかには、研究部以外にみずから史料講読の勉強会を主催し運営している者も存在する。

勉強会は研究部同様に月 1 回開催され、南北朝期の史料である『園太暦』を輪読する会や、Twitter などで参加者を募り各自が興味のある史料（南北朝時代に限らない）を持ち寄りそれについてプレゼンを行うというものである。歴史ファン同士、あるいは歴史ファンの中に一部専門家が入ったかたちで行われるこうした史料講読会は、専門家が書いた研究書や一般書に示された視点を確認することだけに留まるものではなく、その史料から得られる独自の視点に気づき、自分なりの歴史観を持つという点で大変有用な場であると言える。参加者の中には、こうした勉強会に参加することで、社会に出てからも歴史学の学びを継続するモチベーションとしている者も存在するのだ。

4.2「南北タイムズ」の発行

本会では、「世界で唯一の南北朝専門紙」と銘打った「南北タイムズ」という季刊紙を発行している（1・4・7・10 月発行)。

これは、学生時代に南北朝時代を専攻していた齊藤が、「南北朝時代の面白さを共有したい」との気持ちから 2020 年に創刊したものである。記事はマスメディアなどに勤める南北朝時代のファンが主に執筆しており、分量は各号 10 面程度、2022 年 10 月の時点で発行部数は約 80 部となっている。

内容は、南北朝時代に関する史跡や地域イベントの紹介、グッズの制作や販売について記載しているほか、週刊少年ジャンプで連載されている『逃げ上手の若君』や天津佳之『利生の人』といった近年刊行された南北朝時代を扱った漫画や文学作品の紹介や解説、さらには南北朝時代の人物を扱ったショート小説などの連載がある。それら以外にも、研究部の活動報告や南北朝フェスに関する周知も行っている。

以上の点から、「南北タイムズ」の取り上げている記事は、これを見ることで現在南北朝時代を扱った作品や歴史関連イベントにはどのようなものがあるかといったことを一目で知ることが出来る作りになっていると言える。

4.3 南北朝フェス

図-3　第1回南北朝フェス・トークショーの様子

2022年には、南北朝を主題としたフェス「第1回南北朝フェスin鎌倉」が行われた。

フェスは6月19日、6月25日の2日間に渡り開催され、1 日目はオンライン開催にて、新名一仁氏（日本中世史研究者）による中世島津氏についての講演が行われた。参加者は動画送付サービス利用者含めて30名程で、歴史ファンがほとんどである。内容は、南北朝時代に活躍した島津氏をはじめとする九州の武士たちの群雄割拠についての講演であり大変専門的なものではあったが、あまり知られていない史実と新名氏の語りの上手さにより、会は盛況であった。

2 日目は、鎌倉芸術館にて現地開催であった。内容は、雅楽の演奏や「南北朝の魅力を語り尽くす」トークショーの他、能の所作×ロボット開発についての対談や岸本洋一氏（文化資源学：京都芸術大学博士課程（開催当時））による鎌倉の史蹟や石碑についての講演などが行われた。雅楽の演奏やトークショーのようにフェスらしい企画もあったが、能の所作×ロボット開発のような理系との連携企画や、岸本氏の講演といった若手研究者による最新の研究成果が披露されるような企画も存在し、必ずしも歴史だけには留まらない南北朝時代の魅力を十二分に引き出したフェスであったと言える。

4.4 連続ワークショップ「いま読みなおす『太平記』～南北朝時代をもう一歩知ろう～」

連続ワークショップ「いま読みなおす『太平記』～南北朝時代をもう一歩知ろう～」（以後は「太平記WS」と表記する）は、2022年5月から9月まで開催された計7回の連続ワークショップ企画である。谷口雄太氏（日本中世史：青山学院大学（開催当時））を講師とし、参加者がグループに分かれ岩波文庫版の『太平記』を読み進めて行く。当期では鎌倉幕府滅亡と直接結びつく巻7が取り上げられ、本巻の各節を参加者たちが担当に分かれて読み進められた[註14]。各参加者はテキストを講読、担当個所の解釈や用語などを事前に予習し、「太平記 WS」当日には各自、チームでレジュメを用意する。

グループワークという性格上、各自が分担して担当箇所に当たるのだが、なかにはみずからの個性を活かしレジュメを作成する参加者もいた。それは例えば、旅好きの参加者であれば担当個所の舞台に赴きそこで現地調査をしてくるとか、古文書を収集するのが趣味の参加者であれば、担当個所と同時代とされる文書を並べることで文中には示されない背景を提示したりといった具合にである。

また本WSでは、グループワークの強みがうまく生かされた。それは、このような発表に不慣れな参加者であっても他の分担者が個性を活かした発表をすることでそれがフォローとなった点である。このようなかたちで進められる発表は、結果としてさながら大学院のゼミのようになった。

「太平記 WS」は対面での参加を基本とするが、遠方などの参加希望者に対しオンラインでも参加可能としている。オンライン参加者であっても、対面参加者同様に担当個所が割り振られ発表することを義務付け

られているのである。

グループ発表の総括として、講師である谷口氏は、「お金を払って苦しみを味わう会」であったはずの本会だが、参加者それぞれが個性を活かして報告を進めたことには驚愕した。『太平記』は、一次史料や各版本の比較はもちろん、近世から現代に至るまでの評価や歴史学以外の学問（国語学や仏教学など）との協働が不可欠な「全方位的に検討が可能なテキスト」であるため、参加者それぞれが一人で読み進めるのではなく他の参加者の視点を共有したうえでテキストを読み進められたのは大きな利点であると語った[註15]。結果的に本 WS は、一般の歴史ファンと専門学知をつなぐようなイメージの企画になったと言えるであろう。

5　歴史学研究者が歴史イベントに関わる意義

本章では、これまでに紹介してきた企画に対し、筆者が歴史の専門家としてどのように関わってきたのか、関わることにどのような意義があるのかということを考えて行く。

5.1 歴塾への参加

歴塾は、ビジネスとして歴史に関わり盛り上げていく方法やノウハウを学ぶ場である。歴史イベントを企画する際には、参加者側の歴史に関する興味関心をおさえておくのは当然であるが、話題になっている時代や地域、歴史事象などといった、イベント開催時期前後における世間の歴史に関するトレンドについても同時におさえておかねばならない。世間の歴史に関するトレンドとは、例えばどのような大河ドラマや歴史ドラマが放映されているか、話題になっている歴史に関する一般書やゲームは何かということである[註16]。

一方で歴史イベントの企画者は、こうしたトレンドについては情報収集を怠らないものの、専門家が普段から出入りをしている学会の動向については全く知らないことが多い。最近では、最新の研究について新書を媒体として一般の読者に届けるといった日本中世史における積極的な試みが存在するため[註17]、歴史イベント企画者などもこのようなところから情報を仕入れることは出来るのであるが、学会にみずから参加し専門家の議論している最新の研究動向を探ることまで行おうとする者は稀である。

以上から、世間の歴史に関するトレンドと学会におけるトレンドについて関係付け、専門家がそれについての更なる知見を提供した場合、こうした知見はイベント内容に関する比較材料として企画者や参加者に喜ばれることになる。また同時に、非専門家にとっては敷居の高い学会という場について専門家が話題にすることで、非専門家にも学会や専門家という存在をより身近に感じてもらうことが出来るようになる。

5.2 ヒストリンクへの参加

歴塾と同様にヒストリンクも、学会や専門家をより身近に感じてもらうことが出来る試みであると言える。ただ、ヒストリンクでは「マッチング」を目的としたサービスという設定上、歴塾に比べ専門家と依頼者との関係がより教育性に富んだものになる傾向があると考えられる。ここでは、講師として名を連ねている筆者が、ヒストリンクを実際に担当した際に感じた事柄を記していく。

例えば、専門家自身が専攻している地域や時代に近い歴史事象を卒論などで探求していきたいと考える学生依頼者と引き合わせが叶った場合、それを追究していくために押さえておかねばならない基本文献や工具書などを直に教示できる。そうした基礎的な内容に留まらず、マッチングを経ることによって同じような歴史事象に興味を持った学生と巡り会えたという「同志意識」が芽生え、自分自身の研究へのモチベーションに影響を与えるということもある。

逆に、具体的な研究方法はあえて伝えず、学生の学修環境をリスニングしたうえでその学生の身近にいる教員や先輩などのアドバイスを頼るべきであると、依

頼者を意図的に突き放すことも出来得る。これは、周りの人間が自分の問題関心とは違う場合であっても基本的な研究方法や工具書の扱い方は共通しており、まずはこうした基礎的な作業への注心を促すことでみずからの研究への研鑽につなげてほしいという教育的な配慮である。

一方、企業の要請などによる講演会の実現は、専門家が非専門家に対しみずからの知見を直接的に披露できる機会となる、専門家によるこうした行動は、社会に対する歴史実践に直につながると言って良いであろう。

5.3 南北朝時代を楽しむ会研究部への参加

筆者の専門は近世の琉球史である。学生の時は近世琉球史を研究すべく東洋史専攻に身を置き、中国史（明清時代史）研究の訓練を受けながら琉球史の研究を進めていた。

近世琉球史を研究するのに必要とされるのは、漢文と候文の読解力と、それぞれのくずし字を読み解くための翻刻力である。よって筆者は、中国史のゼミにて漢文史料の訓練を受けつつ、日本近世史のゼミにも顔を出し、くずし字で書かれた候文読解の訓練をしていた。また、研究対象が日本近世の儒学に関係する事柄ともリンクしていたことで近世日本の儒者が残した漢文史料に触れたり、自主勉協会にて、清代中国の地方における土地不動産に関する契約文書や地方官吏が各官庁同士で出し合ったくずし字で書かれている漢文史料（档案）を読み解くための訓練を行っていた時期も存在した。結果、学生時代を中心に、近世期の琉中日における様々な形態の漢文史料に触れたことになる。さて、筆者は齊藤との出会いから研究部の活動を知っただけでなく、自分にとっては未知の世界である日本中世史の史料に触れてみたいと感じたことから同部に参加することとなった。こうした参加の動機からもわかるように、筆者にとって日本中世史の史料とは、漢文体で書かれているものだということを何となく知っている程度であった。

ただ、実際に研究部に参加し、講読されている『南北朝遺文』の文体を見てみると、自分がこれまで訓練してきた漢文の知識を応用できるのではないかという見解に何と無しに至ることとなったのである。他の時代の史料と同様に、他の時代には無い日本中世史特有の用例や言い回しは確かに存在する。しかし、例えば契約文書が出てきた場合、その大まかな意味やニュアンスについては他の時代や地域における漢文史料の表現や文法とそう大差あるものではない。このように、日本中世史の研究手法や時代背景についての知識は皆無であっても、他地域他時代との内容の比較や、漢文史料におけるニュアンスや文法を理解していることで史料の大意が把握できることから、日本中世漢文史料読解の指南役は買って出られることに気が付いたのである。

大抵の場合、時代背景については参加者の誰かしらが知識を有しているため、時代背景と史料の書かれ方に対しどのような点に着目するべきか、本史料の言わんとしていることは何か、といった歴史学における目の付け所を、専門家である筆者が他の参加者に提示するのである。このように、みずからが日本中世史ではなく歴史学における指南役として振舞うことで、部内での議論が一層白熱し、かつ参加者たちは今取り組んでいる史料の着眼点を見出すことでより史料から歴史を読み解く楽しさに気づくことができる。

また同時に、くずし字などの判別などを通し、翻刻活字化された史料集の該当箇所や、大家によって提唱されている学説などに対し疑義を挟めるようにもなる。その一方で、普段目にしている歴史の書籍などが専門家のどのような営為のもとに執筆されているのかを歴史ファンに知ってもらうきっかけともなる。

このような知的営為は、歴史ファンだけの勉強会では成し得るものではないだろうし、専門家同士の集まりであっても知見の提唱によって他分野の研究者も巻き込んだうえでその場が白熱するということも稀だろ

う。こうしたことから、専門家と歴史ファンが合同し、その場での協働のもとで営まれる勉強会が開催されることは、専門家が歴史ファンと同じ目線で史料に向き合う際の専門家の参加意義と言えるのではなかろうか。

5.4 専門家が歴史ファンに接する時の注意点

ただ、専門家が歴史ファンのコミュニティに参加する場合、注意すべきこともいくつか存在する。なかでも特に気をつけておかねばならないのは、専門家と歴史ファンでは、歴史的対象についてみずからが明らかしたいと考える内容やとらえ方ににについて大きな差異が存在することが少なくないという点である。言い換えれば、この両者では歴史に対する目的意識や見方、楽しみ方がそもそも違うということである。

例えば専門家の場合、対象の文書に書いてあることから歴史背景を明らかにし、それが他の歴史的事象とどのようにリンクし位置づけられるかといったことに興味を持つ。それに対し歴史ファンは、自分が興味を持っている歴史事象の内実や裏話といった「ストーリー」を明らかにすることを目指したり、また歴史上の人物について自分の知らない「事実」を求めるなどして、より深くその人物にコミットするということを目的とする傾向が強い。言わば歴史ファンは、自分の興味のある歴史事象が先にあって、そこに文書を位置づけていきたいといった動機を持っていることが多いのだろう。こうした点で、専門家と歴史ファンの歴史的事象についてのアプローチは全く逆向きなのである。

こうしたことに専門家が気付かず、歴史学的手法に則って歴史ファンを断罪したり、歴史学的観点に立っていないということを言い立てて歴史ファンを非難する態度が以ての外であるのは言うまでもない。そうならないためにも、専門家は自分たちが普段から行っている歴史学的営為を歴史を明らかにするための唯一無二の方法論だと考えてはならないのである。歴史を介した交流の場では、歴史ファンの言うことがたとえ歴史学的方法論や史料論に則っておらずとも、専門家は別の観点からその歴史ファンの考えを評価せねばならないのである。

専門家が専門家を称してこうした集まりに参加する場合、当然のことながらその場で行う発言のハードルは上がる。これは歴史学に限ったことではないが、自分がその世界のプロフェッショナルであった場合、その空間においては当然のように自分は「先生」として周りから見られることになる。こうして、その場においては自分の存在が特権化されることとなり、プロフェッショナルでない周りの人間はプロフェッショナルの言動に対し口を挟みづらくなるのである。同様に、権威化した者の言動は、参会の場に対しても大きな影響力を与えることとなる。そのため、専門家自身も迂闊な発言や言動を謹まねばならなくなるのである。

では、専門家であることを隠して参会すればこのようなことは起こらないのではないか。その答えは否である。なぜなら、みずからがその分野の学問的知識や技能を持ち合わせているということは、コミュニケーションを通して周りに察せられることになるからである。史料が周りよりも良く読めている、あるいは対象となっている歴史的事象に対する説明や持論を述べられるというところで、これまでに培ってきた「学問的素養」が顔を出すことになる。こうしたことは、歴史学以外の学問を行ってきた者でも例外ではない。「専門知」を営為追究してきた者は、その学問分野における方法論によって物事を思考するようになる。そうした思考的営為はその者の言動に表れ、そのことによって周りからは差別化され「一目置かれる」ことになるのである。

以上のことから、専門家が歴史ファンと交流する場合、みずからの素性は隠さずに初めから専門家として振舞った方が良いであろう。専門家として振舞うことで「先生」とならねばならず、そのことにより権威化せざるを得なくはなる。だが権威化することで、史料の読み方、歴史事象へのアプローチの仕方や考え方などと言った専門知を参加者に提示することが可能にも

なるのである[註18]。同時に、周りとは違うという自覚を強く持つことで、その場での言動には責任を持たねばならないという意識が働くようになる。このように、専門家が「先生」となり他の参加者には真似できない専門知を提供することは、その場の議論を活発化させるだけでなく他の参加者の学びとなり、そして専門家自身の自信や責任にも繋がるのである。

6　おわりに

歴史を楽しむ会に限らず、昨今は民間や歴史ファンによる歴史イベントが少なくない。こうした点で、専門家がこれらの団体や人々に関わっていくのは難しくないし、この先はむしろ関わっていくことが普通になっていくものとさえ思われる。だが一方で、上述したように、非専門家と専門家の歴史に接する興味関心や目的はほとんどの場合一致せず、むしろ逆向きであることが多い。そもそもの方向性や目的が異なるという点で、両者の間に認識や意見の食い違いが生じることも少なくないだろう。こうした点で、やはり両者の「共存」は難しいことなのだろうか。

筆者が歴史を楽しむ会グループを通して接してきた、民間の歴史イベント企画者や小説作家などといった民間の「専門家」たちが、みな口を揃えて言うことがある。それは、各自それぞれが行う仕事というのは、アカデミアな歴史研究があっての産物であるのだということである。歴史イベントの企画にせよ歴史小説にせよその大本に来るのは専門家による実証に基づいた歴史研究であり、民間の「専門家」たちはそうした歴史研究をもとに企画や作品を作っていくのだという。このことに照らせば、専門家は歴史イベント等を通じて歴史イベント企画者や歴史ファンとつながり、かつ民間の「専門家」たちと連携しつつみずからの研究を深化させることこそ社会の利益となるのだと考えられる。

また同時に、こうした連携や交流を通して、双方の興味関心や歴史への視点を相互に確認できる機会を作り出すことも可能である。ある一つの歴史的事象をそれぞれがどのように見て、どのように考えるべきか。非専門家の視点を専門家が一通り確認し整理することで、より多角的な視点を専門家は提示出来る。そしてそうした視点を専門家と非専門家の双方で共有することが可能となるのである。

このような営みは、仮に歴史修正主義的な発信があった場合に、それについて専門家が直接的に非専門家に呼びかけることで問題を争点化できるということにも繋がるであろう。専門家による歴史イベントへの参加は、歴史修正主義への対抗にもつながる可能性を秘めているのである。

こうした点で、専門家はみずからがイベントを主催したり、エンターテイメントを追求する必要はなく、「餅は餅屋」ということを意識し民間各界の「専門家」たちにこれらの仕事を託す。そしてみずからは、そうした「専門家」たちが参考に出来る研究成果である論文や研究書、そして一般書の執筆を第一とし、そこに心血を注ぎ続けていくことが何より重要であると考えるのである[註19]。

専門家および専門知は、「権威」である。それは否定すべくもないし、あえて否定する必要もない。「権威」がどのような視点や方法をもって歴史の構成（論文・研究書・一般書の執筆）を行っているのかということを、歴史ファンとの交流の中で直接示していくということが重要なのではないだろうか。

今回あまり取り上げることはできなかったが、歴史を楽しむ会グループの他にも数多くの民間における歴史に関係した企画や団体が存在する。本グループも、そうした個別の団体と連携しながら会の運営や企画がなされているのである。歴史を楽しむ会グループ以外のこうした民間企画や団体の活動については、別稿を用意したい。

〔註〕

註 1　例えば筆者が専門とする琉球・沖縄史では、近代沖縄史を中心とした若手研究者たちが運営する「沖縄歴史倶楽部チャンネル」が存在する。
「沖縄歴史倶楽部チャンネル」
https://www.youtube.com/channel/UCgvGTd-VR2CY3LL-3Xy9F5g
（アクセス日 2022 年 7 月 17 日）

註 2　本稿の内容と視点が比較的近いものとして参）5 を挙げておく。本文献は、民俗学における「イベント」研究についても言及している。

註 3　本稿では便宜上、歴史学の専門教育を受けているという点から大学院生（Master,Docter いずれにおいても）を「専門家」のカテゴリーに含めるが、そうした点が不明確な小学校から高等学校までの社会科および歴史の教員についてはこのカテゴリーには含めない。ただし、こうした教員のなかでも独自に歴史学的手続きのもとに歴史研究を行い、かつ論文などの業績によって学会等に認知されている者についてはこの限りではない。

註 4　「歴史を楽しむ会 HP」
https://historyenjoy.com/
（アクセス日 2022 年 7 月 17 日）
以下、特に断りが無い場合「歴史を楽しむ会」の詳細情報はこれに依拠する。

註 5　「Histlink HP」
https://peraichi.com/landing_pages/view/histlink/
（アクセス日 2022 年 7 月 17 日）
以下、特に断りが無い場合「ヒストリンク」の詳細情報はこれに依拠する。

註 6　各会における大まかな会員の男女比は、2022 年 7 月現在で男：女＝6：4 である。

註 7　例えば、2022 年では歴史を楽しむ会が大河ドラマ「鎌倉殿の 13 人」を意識した鎌倉散策を行った。

註 8　こうしたプレゼン企画については、神田駿河台にある「渡部商店」が週 1 回開店している企画「レキシズルバー」のプレゼン企画から齊藤がヒントを得ることで始まった。

「レキシズル HP」
http://www.rekisizzle.com/about_bar.php
(アクセス日 2022 年 7 月 17 日）

註 9　小川氏は、個別に「大河ドラマを愛でる会」を主宰し、大河ドラマファンの啓発活動を行っている。
「大河ドラマを愛でる会 HP」
https://taigadoramawomederukai.qloba.com/
（アクセス日 2022 年 7 月 17 日）

註 10　戦国魂 HP
https://www.sengokudama.jp/
（アクセス日 2022 年 7 月 17 日）

註 11　「マンガ家芸能プロダクションまんがたり HP」
https://www.mangatari.co.jp/
（アクセス日 2022 年 7 月 17 日）

註 12　「軽野造船所 HP」
http://karunozosenjo.com/
（アクセス日 2022 年 7 月 17 日）

註 13　「南北朝時代を楽しむ会 HP」
https://enjoy-nanboku.jimdosite.com/

（アクセス日 2022 年 7 月 17 日）
以下、特に断りが無い場合「南北朝時代を楽しむ会」の詳細情報はこれに依拠する。

註 14　2022 年 9 月現在、2022 年 10 月末から 2023 年 3 月にかけて、講読箇所を巻 8 に設定した全 7 回の WS 開催が予定されている。

註 15　2022 年 9 月 11 日実施「太平記 WS」第 7 回、谷口氏総括。

註 16　日本中世史界隈では、こうしたトレンドと歴史研究との関連性を明らかにする試みが近年意識的に行われている。例えば、「特集／エンターテインメントの世界から見た日本中世史」（歴史化学評議会編『歴史評論』No.870（ 2022 年 10 月号））。

註 17　たとえば、山田徹等編『鎌倉幕府と室町幕府最新研究でわかった実像』光文社、2022 年など。

註 18　参 6）　147－148 頁において小田中直樹氏は、こうした権威化を避ける方策として、専門家とが非専門家に接し議論するに際し上下関係のない水平的なコミュニケーションを築くべきであると提唱する。小田中氏は、過去の史実に関する専門的知識を専門家が有していることでの権威化を避けるべきだとの見解を示しているのであり、本稿で言及している歴史学的方法論の提示や史料読解の技術について言っているのではない。
筆者も、史実に関する知識を有しているという点では小田中氏のいう水平的コミュニケーションを支持するが、史料読解などに関する専門的な見方や技術について言えば、本文で示した通り「先生」として権威化し周りを導いて行くべきであると考える。

註 19　専門家の中には、書店がいわゆる歴史の「トンデモ本」を売ることが非専門家に対し歴史認識を誤らせる行為として非難する者がいる。しかし、過去に書店員であった筆者から見れば、これは大きな誤解である。書店は経営のために「トンデモ本」を売るのであり、これは「経営の問題」に他ならない。歴史認識を誤らせるというのは「モラルの問題」であり、これは別個に考えねばならないものである。
　以上から、専門家が書店の売り上げの問題に口を出したり、こうした書籍を購入する顧客のモラルを憂慮するのは筋違いであると筆者は考えている。

［引用文献］

1) 菅豊 (2019)「パブリック・ヒストリーとはなにか？」（菅豊・北条勝貴編『パブリック・ヒストリー入門』）勉誠出版，6

［参考文献］

1）北条勝貴（2019）「パブリック・ヒストリアンへの道程－あとがきにかえて」（菅豊・北条勝貴編『パブリック・ヒストリー入門』）勉誠出版, 463-474

2）菅豊（2019）「パブリック・ヒストリー - 現代社会において歴史学が向かうひとつの方向性」（菅豊・北条勝貴編『パブリック・ヒストリー入門』勉誠出版, (1)-(12)

3) 菅豊 (2019)「パブリック・ヒストリーとはなにか？」（菅豊・北条勝貴編『パブリック・ヒストリー入門』）勉誠出版，3-68

4）歴史学研究会編（2020）「特集　進むデジタル化と問われる歴史学」『歴史学研究』1000

5）及川祥平（2017）「神・偉人の観光資源化と祭礼・イベント―大岡越前祭と信玄公祭り」（『偉人崇拝の民俗学』）勉誠出版，239-282

6）小田中直樹（2022）「コミュニカティヴな実践としてのパブリック・ヒストリー」（『歴史学のトリセツ』）筑摩書房

Collaboration Between History Fans and History Experts
－Historical Practice to “Participate in” History Events－

〇Youjyu ITO　　Taichi SAITOH

abstract：In these days, by collaborating between history experts and “non-history experts”, a majority of people without historical education, the attempt of “public history” has become very active as a historical practice. Reflecting this tendency, the collaboration among some organizations, researchers and academic societies has been conspicuously increased, and some history experts also have been sending positive messages about this tendency to the public.　In reality, however, most history experts, as one of the history fans, rarely participate in or get involved in “history events” where many ordinary history fans gather and become active.

This paper is the joint work with one of the co-authors, Saito, sponsoring “Meeting to enjoy history”, and the leading author or a history expert, Ito, participating in this meeting as one of the history fans.　So, in the first part of the paper, some previous activities of “Meeting to enjoy history” will be taken up and how the history events are performed among history fans or the general public will be introduced.　In the latter part, the paper will show how positively the leading author has been involved in “Meeting to enjoy history” and how beneficially both history experts and non-history experts can get involved in the meeting.

From above, it is in the hope that the positive participation in history events will be enlightened and encouraged for the benefit of history experts.